

ポポフ ニュース 13

2006年6月号

No.



Pole pole Foundation

ポポフ (POPOF) はポレポレ基金 (Pole Pole Foundation) の略称で、1992年にコンゴ民主共和国で設立された NGO (非政府 非営利団体) です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕するヒガシローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコ・ツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、ヒガシローランドゴリラを題材にした絵はがきを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと思います。



◀ 双子ゴリラ



活動報告 (2005年6月から2006年5月まで)

6月(3月から引き続き)～9月(2005年)

●特別展「魅惑のアフリカ熱帯林」ポポフの活動紹介とグッズ販売 日本モンキーセンター(犬山市)

6月11日

●自由の森学園記念講演会「ゴリラに学ぶ、自然に学ぶ～ゴリラと人との共生をめざして～」

講師：山極寿一 自由の森学園(飯能市)

6月14日～19日

●石ゴリラ展 早川篤の石ゴリラとポポフ・グッズの展示販売 堺町画廊(京都市)

7月23日

●グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」池田市ひつじ文庫(池田市)

7月27日

●グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」法然院(京都市)

7月28日～30日

●国際シンポジウム「イルカ類と霊長類の比較社会生態学」ゴリラの社会生態とポポフの活動紹介
京大会館(京都市)

7月31日

●グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」五個荘図書館(東近江市)

8月14日～9月3日

●GRASP-(大型類人猿保全計画日本委員会)特別展示「大型類人猿の保護」
愛地球博国連館(長久手町)

8月20日

●グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」ルカニ村図書館(タンザニア・ルカニ村)

8月22日

●法然院「夜の森の教室」「ゴリラと会話するためのひみつ」講師：山極寿一 法然院(京都市)

9月3日～13日

●「アフリカの絵本原画と児童書展」『ゴリラとあかいぼうし』原画展 アートはるみ(東京都中央区)

9月3日

●講演「ゴリラが絵本を読んだら？」講師：山極寿一 アートはるみ(東京都中央区)

11月5日

●グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」犬山市立図書館(犬山市)

11月16日～23日

●「アフリカの絵本原画と児童書展」『ゴリラとあかいぼうし』原画展 京都市国際交流会館(京都市)

11月23日

●グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」京都市国際交流会館(京都市)

3月22日(2006年)

●グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」京都大学総合博物館(京都市)

3月28日～4月2日

●「アフリカの絵本原画と児童書展」『ゴリラとあかいぼうし』原画展彦根市立図書館(彦根市)

4月1日

●グループ・マブワナ「アフリカとともだちになろう」彦根市立図書館(彦根市)



ジョン・カヘークワ 国立公園とポポフ

◀小さい頃ワナで手首を失ったムガルカ(ダビッド・ビシムワ画)

ワナのワイヤーが手首に巻き付いている子どもゴリラ(ダビッド・ビシムワ画)▶



会計報告

「ろうきん東海NP O 団体等寄付システム」から、寄付金をいただいています。

収入		支出	
昨年度よりの繰越金	801,668	ニュースレター印刷費	20,000
講演会・シンポジウム カンパ	50,000	ニュースレター・ホームページ作成費	40,700
作品売上寄付	103,740	ポポフグッズ材料費	8,214
ポポフグッズ売上(現金)	43,140	郵送費	28,960
ポポフグッズ委託販売	56,022	ポポフへ送金	1,443,360
寄付(現金)	20,563	次年度へ繰越金	401,912
売上・寄付(郵便振替)	868,000		
受取利子	13		
計	1,943,146	計	1,943,146



カフジ・ビエガ国立公園は、科学的価値、観光的価値、教育的価値をもつ世界有数の自然保護区です。しかし、公園の周りには6つのコミュニティがあり、世界遺産の価値をまだ理解していない貧しい人々が暮らしています。長い間、公園当局はこれらのコミュニティと対立関係にあり、公園内の貴重な資源は人々によって荒らされてきました。コンゴ民主共和国政府は公園の動植物相を保護するために、武装した監視員によって公園内をパトロールする方策を講じてきました。1985年からはドイツの技術協力が入って監視体制は強化されましたが、密猟を完全に防止することはできませんでした。

1992年からはじまった私たちの民間活動ポポフは、武器を用いずにさまざまな方法で人々を説得し、公園内の不法な活動、野生動物の捕獲や商取引、伐採や地下資源の採掘などの減少に務めてきました。ここ10年間の内戦という困難な状況にもかかわらず、ポポフによって推進された活動はめざましい成果を挙げることができました。皆様のご支援に深く感謝したいと思います。

公園を管理する上で一番の問題は密猟の防止です。密猟はそれぞれのコミュニティが異なった方法で行っています。例えばバシ人は銃でゾウやイノシシを狙い、バトゥワ人はワナをかけてヤマアラシや小型のカモシカを、犬をつかって大型のカモシカを狩ります。ただし、1996年に内戦が勃発するまでは密猟による被害はそれほど甚大ではありませんでした。国立公園が設立された1970年以来26年間にゴリラがワナにかかった例は28回起こっていますが、ワナでゴリラが死ぬことはありませんでした。ゴリラを直接狙ったワナではなく、カモシカ用のワナにかかっていたからです。でも手が利かなくなったり、手首から先が落ちてしまったゴリラもありました。

しかし、1994年にルワンダ紛争で数十万人の難民が公園の近くにやってくると、それまで銃を持たなかった密猟者に難民キャンプから多くの銃が流されるようになりました。たちまちのうちにゾウが撃たれ、ひそかに象牙が取引され始めま



カフジ・ビエガ国立公園のガードたちとカヘークワさん

した。そして、1996年に内戦が勃発し、難民たちが一斉にキャンプから逃げ出すと、公園内は難民や兵士であふれるようになりました。毎日森では銃声が鳴り響き、ゾウやゴリラなど大型動物が食料として狩られたのです。反乱軍に銃を取り上げられてしまった公園の監視員はパトロールに出ることができず、密猟や盗伐、採掘はすべてなすがままに放置されていました。その結果、1996年に335頭数えたゾウは2000年に5頭に、247頭いたゴリラは130頭に減ってしまいました。

この状況を重大な危機とみた公園当局は、密猟者に呼びかけを行い、これまでの罪を問わない代わりに密猟の停止を提案しました。そして、密猟をやめれば公園が雇用することを約束したのです。驚いたことに、これまでに名を知られた密猟者たちが続々と呼びかけに応じてきました。すでに狩りで得られる動物の数はずいぶん減ってしまったし、密猟を続けていても将来がないことを敏感に感じ取ったのでしょう。でも政府の支援も外国からの援助も停止している状況では、公園当局に余分の職員を雇用する費用はありません。そこで、ポポフはこれらの密猟者とその家族をポポフの活動に参加させ、いくばくかの給料を払ったり、製作物を買取ったりしてきました。雇用した人々の数は47人（男26人、女21人）にものぼり、これらの人々はポポフの経営する苗木センター、環境教育学級、アートセンターで働いています。

その結果、公園当局や京都大学が観光と研究目的でゴリラを入付けしている地域では、不法な活動がめっきり減りました。2003年には暫定政府が設立されて、公園監視員が銃を持ってパトロールができるようになりました。2004年にこれらの地域で監視員が撤去したワナはわずか16個にすぎません。公園内に許可なく侵入して逮捕された人々は12人、不法な伐採が4件、蜂蜜やキノコの採集が4件でした。内戦時と比べると格段に減っており、内戦前と比べてもずっと少なくなっていると思います。2005年には人付けされたゴリラの集団で次々に赤ちゃんが生まれて、ゴリラの数が増え始めています。ポポフの活動が見事に実を結んだと一同喜んでいます。これからも公園当局と協力しながら、密猟の防止に努めていこうと思っています。



ポポフ事務局のメンバーとバサボセさん



カニユニ・バサボセ十山極寿一 ビチブさんが亡くなりました

ヒガシローランドゴリラの研究と保護に多大な貢献をし、そのユニークな絵とやさしい人柄で多くの人々から慕われていたビチブ・ムフンブーカさんが昨年10月8日に亡くなりました。1昨年にマラリアで倒れて以来、ずっと体調を崩していたのですが、10月に入って急に病状が悪化し、帰らぬ人となりました。享年55歳でした。

葬式は10月19日にカフジ・ビエガ国立公園の近くのカタナで行われました。はなはだしく日程が遅れたのは、ビチブさんの3人の妻と23人の子どもたちが各地に散らばって住んでいて、連絡に時間がかかったためです。葬式には親族をはじめ、これまでビチブさんと親しかった友人たち数百人が出席し、その早すぎる死を悼みました。

ムワミ（首長）というビチブさんの愛称は、彼が実際に村長だったことから来ています。父親がマシシ地方の村長で、長男の彼はその跡を継いだのです。でも、ビチブさんの類まれなる指導力と包容力に魅せられた人々が、このあだ名をつけたことは疑いありません。それほどビチブさんは男にも女にも、老人にも子どもたちにも絶大な人気がありました。

ビチブさんがカフジ・ビエガ国立公園のガイドになったのは20歳のときです。生まれ故郷のマシシは広大な牧場が広がる山地です。森にはゴリラやチンパンジーが住んでいて、時折ゴリラが牧場に出てきて牛と一緒に歩いていることもあったそうです。ビチブさんは小さい頃から森で思う存分ゴリラを追いかけてみたいと思っていたのです。ガイドになってからビチブさんは、初代公園長のアドリアン・ディスクリベール氏と協力してゴリラの人付けに取り組み、見事に2集団のゴリラを人に馴らすことに成功しました。以後、カフジ・ビエガ国立公園はゴリラ・ツアーの中心地として世界に名をはせるようになりました。

1980年代に一度マシシへもどって村長になりますが、1990年に京都大学の調査チームに加わりゴリラの調査補助員として活躍を始めました。その後、ザイールは首都や州都の暴動、隣国ルワンダからの難民流入、内乱と混乱を極める日々が続く、日本の研究者は入国することが困難になりました。この間、ビチブさんは変わることなく不屈の意思を持って調査を続けてくれました。おかげさまで、1991年に人付けをはじめたガニャムルメ集団の動向は、現在に至るまでモニターされています。ゴリラの研究にとっても保護にとってもこれは貴重な記録です。



ビチブさんは1999年に来日し、それまでに描いた絵をもとに堺町画廊で個展を開きました。誰にも絵を習ったことはなく、鉛筆やクレヨンを使い独特なタッチで描いた絵は、日本でも大きな人気を呼びました。とくにゴリラの姿はユニークで、大きなおなかと長い顔はまさにヒガシローランドゴリラなのですが、なんとも言えずユーモラスで味があるのです。ビチブさんのゴリラへ寄せる思いがにじみ出ているような気がする顔と姿がそこに描かれています。色使いも独特で、赤い牛、紫の人間、黄色い山羊などが登場します。戦いや密猟者を捕らえるシーンなど、少々残酷な絵も描かれています。ビチブさんは、絵を描きながらそれまでの人生を振り返っていたのかもしれませんが。

初めて飛行機に乗って日本へやってきたビチブさんは、あらゆることに驚きの目を見張りました。どこの店にも物があふれ、レストランが多いことにびっくりしつつ、やはり故郷のウガリ（キャッサバ粉を練ったモチ）がおいしいと言っていました。地下鉄からぞろぞろ出てきた人の



◀2年前に奥さんと一緒に

▲比叡山スキー場でバサボセさんと



◀ 1978年当時のビチブさん



山極寿一 ゴリラたちの近況

列をながめて、カチンバブロンゴ（地下に住む大きなネズミ）のようだ、と言っていたのが印象的でした。生まれて初めて雪に触れ、冬の寒さに縮み上がりました。神戸のルミナリエを見に行き、地震で多くの被害が出たことをわが身のように悲しんでいました。その2年後に故郷の火山が爆発して町が溶岩で埋もれ、ビチブさんの奥さんが開いていた店もつぶれてしまいました。そのときビチブさんは、きっと神戸のことを思い出していたことでしょう。

ビチブさんが日本の研究者と知り合ったのは1978年です。それ以来ずっとビチブさんは日本へ行ってみたいと言っていました。ゴリラツアーのガイドだったビチブさんは多くの外国人と出会いましたが、日本人が一番のお気に入りだったようです。そんな彼を日本へ呼ぶことができて、彼に日本のよさも悪さも理解してもらって、本当に良かったなあとと思っています。その後、ビチブさんの話のおかげで現地に日本と日本人のファンはずいぶん増えました。今は、ビチブさんの跡を継ぐ若者が何人も育っています。彼らがきっとビチブさんの志を立派に受け継いでくれることでしょう。

ビチブさんが見守り続けたゴリラたちもきっと元気に生き抜いていくでしょう。私たちと同じように、ゴリラたちもあの優しくいたずら好きなビチブさんの目が忘れられないだろうと思います。人とゴリラとの出会いがこんなにも豊かで楽しいものだったことを、ビチブさんとともに私たちは覚えていようと思います。安らかにお眠りください、ビチブさん。

ゴリラたちには平和がもどってきました。この1年間でゴリラが密猟の被害にあったり、ワナで傷ついたりしたことはありません。

昨年の5月にチマヌーカ集団に生まれた双子は元気に育っています。メスの数は16頭に増え、赤ん坊は4頭、大集団になりました。妊娠しているメスもいるようで、これから続々と子どもが生まれるでしょう。

ムガルカ集団からは1昨年、メスのルシャシャが子どものチュバカを置いて出て行ってしまい、シルバーバックのムガルカはチュバカと2頭で暮らしていました。数ヵ月後にメスたちがどやどやと参加してきて、現在はチュバカ（5歳）と同じくらいの子ども、若い個体3頭、おとなのメス5頭の計11頭で暮らしています。今度こそムガルカがメスを失わないように、立派にリーダーとしてメスたちに頼られるオスになってほしいと思います。

しばらく行方不明になっていたビリンドゥワ集団は、メス4頭、子ども1頭、赤ん坊2頭の計8頭で暮らしていることがわかりました。以前はまだ若いシルバーバックだったビリンドゥワはすっかりたくましくなり、威風堂々としています。きっとさまざまな集団と出会って、自分の力を試して成長してきたのでしょう。以前ニンジャ集団にいたイラギ、カンバ、ゾヴ、クワレはビリンドゥワのもとに残っていて、ゾヴとクワレが赤ちゃんを抱えています。やっと赤ん坊が生まれたので、おそらくこれらのメスはビリンドゥワと仲良くやっていくことでしょう。将来が楽しみです。

ムファンザーラ集団には、赤ん坊はいません。



◀ チマヌーカ

以前生まれた 2 頭の赤ん坊はもう乳離れして子どもに育っています。もう誰が母親かわからないほど、独立して自由に歩き回り、ムファンザーラのそばにベッドをつくって休めます。このところ、メスの出入りが頻繁だったのですが、だいぶ落ち着いてきたようです。

新しく人付けしたランガ集団には当初子どもがいなかったのですが、昨年赤ん坊が 1 頭生まれました。以前ビリンドゥワ集団と衝突して 2 頭のメスを得ましたが、現在メスの数は 5 頭、計 7 頭の集団です。シルバーバックのランガはまだ若く、おそらく 20 歳前後だろうと思われます。このままきちんと集団を維持していけるかどうかまだ心配です。

京都大学が研究目的でずっとモニターしているガニャムルメ集団は 2001 年に 2 つに分裂しました。それは 2000 年にシルバーバックのガニャムルメが密猟者に殺されたことが原因で、リーダーオスを失って群れが不安定になったためだろうと思われます。分裂後、1 つはヒトリオスが、もう一つはまだシルバーバックになったばかりのアルフォンスが率いることになりました。私たちはアルフォンスの集団をガニャムルメ集団の子孫を見なし、ずっと追跡してきました。現在、アルフォンスのほかにメスが 10 頭、赤ん坊が 3 頭いて、しだいに大きな集団になりつつあります。

これらの集団のほかに 2 集団を加え、計 8 集団の動向を現在モニターできるようになりました。2000 年に 130 頭だったゴリラの数も 2005 年には 163 頭に増加していることが確かめられました。多くの人々の努力で、何とかゴリラが生き延びられそうなきざしが見えてきました。とてもうれしく思っています。今後も吉報をお届けできるように、一層の保護の努力を訴えていくつもりです。



◀ 阿部知暁画

カフジ・ビエガ国立公園でモニターされているゴリラ集団の現在の構成

集団名	13 歳 以上	8 歳 以上	8 歳 以上	6 歳 以上	3 歳 以上	0 歳 以上	合計
ムガルカ	1		5	3	2		11
チマヌーカ	1		16			4	21
ビリンドゥワ	1		4		1	2	8
ランガ	1		5			1	7
ムファンザーラ	1		7		2		17
ガニャムルメ	1		10			3	14
ムプングウェ	1		6				7
無名	1		12			1	14
合計	8		65	3	5	11	99



近刊案内

- 小原秀雄著 明石書店
『人類は絶滅を選択するのか』
- 池谷和信・長谷川政美編 世界思想社
『日本の狩猟採集文化—野生生物とともに生きる』
- 日本環境ジャーナリストの会著 山と溪谷社
『つながるいのち—生物多様性からのメッセージ』
- 山極寿一著 東京大学出版会
『ゴリラ』
- 池谷和信編 人文書院
『熱帯アジアの森の民—資源利用の環境人類学』
- 阿部ちさと著 国士社
『ゴリラに会いに行こう—チサトのゴリラ日和』
- 水野一晴編 文芸社
『ひとりぼっちの海外調査』
- 江原昭善著 京都大学学術出版会
『稜線に立つホモ・サピエンス—自然人類学を超えて』
- 山田勇著 岩波新書
『世界森林報告』
- 日高敏隆著 文春新書
『人間は遺伝か環境か？ 遺伝的プログラム論』
- 内村直之 朝日新聞社
『われら以外の人類—猿人からネアンデルタール人まで』
- (財) 森林環境研究会編著 (財) 森林文化協会
『世界の森林はいま』
- 山極寿一著 山と溪谷社
『サルと歩いた屋久島』
- 伊沢紘生+宮城のサル調査会著 どうぶつ社
『サル対策完全マニュアル』
- あべ弘士著(ゴリラ語: 山極寿一)
『ゴリラとあそんだよ』 おおきなポケット171号
- 山極寿一著 新日本出版社
『お父さんゴリラは遊園地』
- ジョゼフ・レマソライ・レクトン著、さくまゆみこ訳、
『ぼくはマサイーライオンの大地で育つ』 さ・え・ら書房

ポポフ・グッズ通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で青色の振り込み用紙に口座番号：00810-1-90217, 加入者名：ポレポレ基金、と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。★は新絵柄が加まりました。

★ポポフ絵はがきセット（10枚組）	1000円
★ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット（5枚組）	600円
☆東ローランドゴリラ・ペンダント	2200円
☆東ローランドゴリラ・キーホルダー	2200円
☆どこでもゴリラ・ブローチ（木彫り）	3000円
☆ケイタイ・ストラップ（ミニゴリラ）	3000円

絵本『ゴリラとあかいぼうし』の読み方と歌のCD販売について

ダビッド・ビシームワさんの絵による絵本『ゴリラとあかいぼうし』（福音館書店）は、ゴリラの言葉がゴリラ語に近づけた発音のカタカナで書いてあります。このため、読み聞かせをするときに、「どうやって発音したらいいの？」と困る方がたくさんいらっしゃるようになりました。そこで、なるべくゴリラに近い発音で読んだ声をCDに録音しました。さらに本の末尾に載せてある「ゴリラとあそぼう」という歌を声とバックミュージックだけのカラオケ調の2種類で録音してあります。このCDを作成費と郵送費、それにポポフへのカンパ代500円を含め1000円で販売します。ご希望の方はポポフ・グッズと同じ要領でご注文ください。折り返しCDを郵送させていただきます。



▲ポポフ絵はがきセット



▲どこでもゴリラ・ブローチ（木彫り）



▲東ローランドゴリラ・ペンダント・キーホルダー



▲ケイタイ・ストラップ（ミニゴリラ）

催しのご案内

- 6月13日～25日
●ビチブ・ムフンブーカ追悼原画展 堺町画廊（京都市）
- 6月18日 15時頃から
●「30年前のゴリラたちとビチブさん」山極寿一 堺町画廊（京都市）
- 9月
●『ゴリラとあかいぼうし』原画展 滋賀県東近江市の図書館（東近江市）
- 11月10日～12日
●第10回サガシンポジウム 名古屋大学・東山動物公園（名古屋）
- 11日はジェーン・グドールさんの記念講演、12日は東山動物公園で類人猿保護の活動紹介と特別講演があります。
- 2007年3月
●『ゴリラとあかいぼうし』原画展 滋賀県草津市立図書館（草津市）



ニワトリ と タカ

語り手：basabose

むかしむかし、ニワトリとタカは大の仲良しでした。いつも、どこへ行くのも一緒。子どもたちも仲良しで、一緒に学校へ行ったり、遊んだりしていました。

また、お互いにどんなものでも、貸したり借りたりしていました。でも、タカにはどうしても貸したくない、大切なものがありました。それは、タカが遠くの国の友達からもらった縫い針でした。縫い針はめったに手に入らない、大切なものだったので。タカは、縫い針をととても大事にしていました。

でもある日、ニワトリはタカの縫い針のことを知って、貸してほしいと頼みました。

「タカさん、私の子どもたちの服はあちこち破れて、ぼろぼろになってしまったわ。どうかあなたの縫い針を貸してくださいな」

タカは、仲良しのニワトリに頼まれて、断わる訳には行きません。でも、とてもやんちゃなヒヨコたちが、針をなくさないか心配でなりませんでした。

「ニワトリさん、この針はたった一本しかない大切な大切な針なの。いつも大騒ぎしているヒヨコたちがなくしてしまわないか、とても心配なんだけど」

タカはそうニワトリに言いました。

「心配なさらなくて、子どもたちには絶対に渡さないから。

きっときっと返しますから、どうぞ私に貸して下さいな」

ニワトリにそう言われても、タカはなかなかうんと言いませんでした。



「タカさん、私達はいつも一緒にいるのに、子どもたちの服がぼろぼろなのも知っているのに、どうして助けてくれないの？」

こう言われると仕方なく、タカはニワトリに針を貸してやることにしました。

「服を繕うために貸してあげるけれど、絶対に失くさないでね。これを失くすと、とてもやっかいな事になるわ」

ニワトリは針を借りて服を繕うと、大切な縫い針を隠しておきました。ところが、ニワトリのヒヨコたちは、本当に手に負えないやんちゃ坊主で

した。タカが心配していた通り、ニワトリが隠しておいた針を見つけて、おもちゃにして、失くしてしまいました。ニワトリもヒヨコたちも針を捜しましたが、見つかりませんでした。

タカはたいそう怒りました。

「あんなに失くさないでと言ったのに。遠いところからもらった大切な大切な針なのに」

そして、その時から、タカはヒヨコを見つけると、食べてしまうようになりました。今でも、タカがヒヨコを襲うのは、この縫い針のせいなのです。

また、ニワトリが地面の土を、足で掘り返しているのをよく見かけるでしょう。あれは失くした縫い針を今も捜しているのです。

今日までまだ、縫い針は見つかっていません。

訳／絵：伏原納知子

ポポフのホームページ

<http://jinrui.zool.kyoto-u.ac.jp/Popof/index.htm>

ポポフの活動紹介、カフジ・ピエガ国立公園、東ローランドゴリラ、ポポフ・グッズなどがカラー写真で紹介されている他、今までのニュースレターがすべて閲覧できます。ゴリラの歩く姿がとってもユニークですよ。ポポフのアーティスト、デヴィッド・ビシムワが製作したアートも通信販売しています。ぜひ、一度ご覧下さい。

連絡先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室 ポポフ日本支部

お願い：ポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。

可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。